



さとのかぜ

No.193号

千葉県いすみ環境と文化のさと

2015年10月1日発行

編集・発行 千葉県いすみ環境と文化のさとセンター
指定管理者 (一財) 千葉県環境財団
〒298-0111 千葉県いすみ市万木 2050 番地
TEL 0470-86-5251 FAX 0470-86-5252
URL <http://www.isumi-sato.com/>
e-mail senta-sato@isumi-sato.com



秋の空とモズの高鳴き

久しぶりに当センター正面の写真です。平成7年に開館してから21年目の秋を迎えています。秋の夕暮、空に浮かぶのは翳雲(巻積雲)です。稲を刈り終えた田んぼや草地の昆虫広場のまわりでは、「キィーキィキィキィ」と一日中モズが鳴いて、見晴らしの良い木々の先端から先端へと移動しています。冬のナワバリを確保するための行動です。長い尾をゆっくりまわすように振っています。小さな猛禽類とも言われることのあるその顔を見ると、くちばしは下向きにとがり、目を隠すように黒い帯があります。「はやにえ」という虫などを捕らえて枝の先に貫いておく行動は有名です。

センターの畑～ジャガイモの話～

センターの畑では、来園された方が成長過程を観察できる展示として、また栽培体験・イベント用として、作物を季節に応じ栽培しています。本号では、私たちの食生活に欠かすことのできない食材のひとつ、ジャガイモのお話です。

●原産地と日本への伝来

ジャガイモの原産地は南アメリカのアンデス山脈で、紀元前 500 年頃から栽培が始まったとされています。

日本への伝来は、江戸時代初めの 1598 年に、オランダ人によってジャワ島のジャガタラ（現インドネシアのジャカルタ）から長崎に持ち込まれました。そのためジャガタラ芋と呼ばれるようになり、転じてジャガイモと言われるようになったそうです。

●ジャガイモの成分

ジャガイモの主成分は品種により多少異なりますが、澱粉約 18、蛋白 2、脂肪 0.1、水分が 80%です。このほかビタミン C、ビタミン B 1、ビタミン B 2、ビタミン B 6、カリウム、鉄などが豊富に含まれています。また、一般にビタミンは熱に弱いものですが、ジャガイモの場合は澱粉に守られているため調理しても損失が少ないようです。

健康効果は、各種ビタミンにより、シミやソバカスの予防改善、疲労回復、血管や神経に対し効果的な働きによる老化防止、また、カリウムの血液中の塩分を体外に出す作用により、高血圧や動脈硬化、むくみ、糖尿病などの予防効果があるとされています。

●センターのジャガイモ

センターでは、今年の植え付ける品種は「ベニアカリ」と「キタアカリ」としました。



「ベニアカリ」は、身が白く煮崩れしやすい特徴があり、つぶして作るコロケ、サラダなどに適しています。「キタアカリ」は滑らかな舌触りで、煮上がり早く、皮付きで蒸したり、粉ふき、スープなどに向いています。

種芋は植え付け前に、各切片に芽が均等に



なるように縦に二等分し、植え付け後の腐敗を予防するため、切り口に草木灰を付けました。植え付けは、あらかじめ元肥を

入れ耕した畑に、幅 70cm の畝を作り株間 30cm で 3 月中旬に植え付けました。なお、種芋は切断面に水がたまらないよう切り口を下にし、7～8cm 覆土しました。

植え付けから約一ヶ月で一つの種芋から数本出芽しました。この芽がすべて生長すると小さい芋が多数でき芋が肥大しないため、生育初期に芽かき（勢いのよいものを 2 本残してほかの芽は根元から取り除く）をしました。

その後の管理は、除草を随時、また、ジャガイモは日光にあたると緑化するため、追肥も兼ねて、土寄せを行いました。



ベニアカリの花



5 月に入ると生長も著しく、出芽後約 1 ヶ月で可憐な花が咲き始めました。

植え付けから約 100 日後の 7 月上



旬、茎葉が半分ぐらい枯れはじめ収穫時期をむかえ、イノシシなどの食害にも遭わず豊作となりました。

収穫した新ジャガイモは、来園された方々に持ち帰って頂き、たいへん喜んでいただきました。

文：Y. T.

参考：「最新園芸大辞典」誠文堂新光社

農機具今昔物語 その十二

時代の移り変わりに伴って、昔の農機具と今日の農機具とを、比較すると想像もできないほどの進歩がみられます。明治、大正時代の農具は人力、または畜力を利用した農機具だけでした。当センターには地元の方から寄贈された、貴重な人力等による昔の農具が展示されています。今回は昔使われていた農具について紹介します。

●乾燥用具

敷物の一種で、一般的には藁藁(わらむしろ)



藁 (むしろ)

をいう。藁藁は、農家の板の間や土間に敷いたり、出入口に垂らして雨風などを防いだ。農作業における穀物の乾燥用などのほか、荷物の包装材料としても広く用いられた。以前は、穀物類の乾燥は全て天日に頼っていた。調整された穀物を日当たりの良い庭先に藁を敷き、薄く広く広げて乾燥させた。

現在は火力を使用し、雨天でも乾燥のできる機械が主流になっている。センターには藁が数十枚ほどあり、稲の粃や麦等の天日乾燥、各種行事の際の敷物として幅広く活用している。

藁は、藁織機の普及により製品化された。すべてを手動で行うものから、藁を手で供給する以外は足踏みで行うものへと藁織機が変化した。それに従い広く作られるようになり、昭和中ごろまで藁織りは農家の重要な副業となっていた。

●収容具

貯蔵用の米俵は俵編み機で藁を材料にして編んだもので、俵の両端に付ける蓋の棧俵(さんたわら)は機械を使わず手で編んだものである。今は紙袋(1袋30kg詰)で手軽に出荷できるが、その当時は俵(1俵60kg詰)で出荷した。俵の隙間から米がこぼれないように詰めることや、大人2人で重い米俵を担いで竿秤(さおばかり)を使い正規の重量を確保することに苦労した。



米俵



棧俵



俵編み機

●選別用具



箕(み)



篩(ふるい)とキビ

穀物や豆類をいれ、両手で揺すり動かし、風であおって悪い実やゴミをふるい分ける農具である。一時的入れ物としても重宝で、竹や藤の皮からできていた。製作や補修には特別の技術を要するため、箕直しと呼ばれる特別な人々が村々を訪れて注文に応じていた。化学製品性だが、現在も普通に用いられている。

篩(ふるい)は円形の枠の下に網を張った道具で、穀類等を入れて振って

ゴミと穀物をふるいわける道具である。網の目の大きさを容易に交換することもでき、穀類等の大きさに応じて使いわける。昔からの穀物の重さや大きさにより選別する手法に加えて、現在は色彩選別機なるものができた。例えばカメムシ(米の一部が黒く変色する)などによる被害米等を取り除くことができ、さらに進化した選別機として活躍している。



色彩選別機



カメムシの被害にあった玄米

文：T. S.

南房総の「食」について(2)～じあじあ・まひまひ～

いすみ市は里山の自然も豊かで恵まれた環境にあるが、漁師の町としても有名である。特にイセエビが有名だが、海の恵みはそれだけではない。季節によってとれる魚は様々だ。

イナダ(ブリは出世魚で30～60cm級の呼び方)、ワラサ(同じく60～80cm級の呼び方)、ヒラマサ、ヒラメ、タ



イ、イサキ、アイナメ、アジ、そして磯の王者イシダイ。漁師の日常的生活に溶け込んだ、地域ならではの郷土料理

を取材した。大原地区で「じあじあ」もしくは「じゃあじゃあ」と呼ばれている料理だ。フライパンで焼く音から名づけられたようだ。同様な料理だが材料をシイラにすると勝浦地区では「まひまひ」と呼ばれているらしい。有名な「さんが焼き」にも似ているが、味噌味の魚肉ハンバーグという言い方が一番適切ではないかという。漁師が商品にならない少し痛んだ魚を食べる時に、魚の臭いを消すため味噌と混ぜ、野菜を入れ作ったのが始まりの様だ。カツオは使わないが、どんな魚でも作ることができる漁師ならではの料理である。

今回は高級魚のイシダイを使って調理した。まず旬の白身魚を三枚に下ろし、身をとる。

今回は100g使用する。包丁で細かくたくよく切ってゆく。包丁もたたき用の包丁を使い、さいの目状にたたいていく。



味噌35g、取材に伺った方の、こだわりの無

農薬のニンジン10g、タマネギ50gを細かく刻んで包丁で混ぜる様にこねていく。味噌を多めに使っていくことで、魚の臭いを消す効果もあると言う。こねた後、片栗粉少々をまぶして、中に粉を入れ込むように練っていく。生姜も少々入れる。ある程度形を整えたら卵をスプーンで少しずつ塗る様にかける。この卵も若いニワトリが産んだ卵で、黄味が薄い黄色だ。こんな薄い色の黄味は初めてみた。これもこだわりのようだ。そして最終段階。フライパンで焼く時も少々片栗粉を振りかける。サラダ油をひき、焼いていく。



名前のおり、「じあじあ」と言う音とともに、良い香りが漂ってくる。両面を焼き終わ



るころには、程よいこげ目ができ、見栄えも良い。料理人ならシソなどおいても良いが、漁師はそんな事はしない、そのまま飾らないのが漁師の生き方らしい。その心意気に魅力を感じる。荒れた海や、極寒の中での漁に相当苦勞をしてきたのだろう。手を見れば苦勞がすぐに分かるような、ごつく、黒い大きい手をしていたのが、とても印象に残る。そんな漁師たちの日常生活の一部を紹介できたことはとても嬉しい。

文：E. N.

取材協力：中村 享氏

夷隅の信仰・風俗・祭り・伝統など（8）～夷隅の六斎市～

「市」は多くの人が集まって物を持ち寄り売買や交換をする場所で、地域の特性を生かし全国津々浦々開かれている。その形態は様々で、毎年ある定まった日に開かれる暮の市(年の市)、盆の市などがある。暮の市(年の市)は年末に立つ市で、年神様の用具やお飾り、雑貨、海産物、正月の必需品などの品物が、盆の市では野菜、雑貨、ゴザ、盆花やホオズキなど盆行事に必要な品物が売られている。また毎月定期的に開かれる六斎市や一定の商品を名指して呼ばれる、だるま市、べったら市、ホオズキ市、アサガオ市、羽子板市、酉の市、ぼろ市などがある。



大原の市

六斎市とは、毎月6回開かれる定期市のことで、いすみ市荻谷、椎木、長者、大多喜町、御宿町内の6ヶ所で古くから開かれている。開催場所は地域経済の中心、交通の要所等で人々が多く集まる場所である。

荻谷の市の始まりは江戸時代にまでさかのぼり、寛永10年(1633年)年頃から開かれ、荻谷公園で1と6の付く日に、椎木の市は延宝4年(1676年)より続き、椎木商店街岬中学校近くで2と7の付く日に、長者の市は寛永2年(1622年)より続き、長者商店街県立大原高等学校岬校舎近くで4と9が付く日に、大原の市は寛永元年(1624年)より続き、大原商店街八幡神社境内で3と8



岬の市

の付く日に、大多喜の市は天正18年(1590年)より続き、新丁の夷隅神社境内で5と10の付く日に、御宿の市は江戸時代より続き、新町朝市通りで2と7が付く日に開かれて、一つの市場圏が形成されている。荻谷を中心に半径約8km圏内のどこかで毎日市が開かれていることになる。これらの市では、地元農家の野菜や花、近くの漁港からの海産物、雑貨、時節の必需品などの売買と人々の交流の場となっている。

「市」は地域に大きな利益をもたらした。その中心は市に参加する商人が売り場を借りるために支払う使用料である。これは売り場を所有する地

主や売り場を共同で所有する町内の収入となった。また市日には遠近から多くの商人や買い手たちが集まり多くの収益をもたらした。



荻谷の市

しかし、近年は経済事情の変化、流通機構の多様化、市場の変化や、交通、購買層の変化等より年々衰退し、場所によっては1~3店のところもあり寂しい状況となっている。

夷隅郡市内の市開催日

地区	市日	開催日	自治体名
荻谷	1・6	1・11・21・6・16・26	いすみ市
椎木	2・7	2・12・22・7・17・27	いすみ市
長者	4・9	4・14・24・9・19・29	いすみ市
大原	3・8	3・13・23・8・18・28	いすみ市
大多喜	5・10	5・15・25・10・20・30	大多喜町
御宿	2・7	2・12・22・7・17・27	御宿町
勝浦	毎日	毎日(水曜日と年始休み)	勝浦市

「市」では三大朝市として有名な輪島の朝市、勝浦の朝市、飛騨高山の朝市がある。勝浦の朝市は、400年以上の歴史があり、天正19年(1591年)勝浦城主であった植村土佐守泰忠(うえむらとさのかみやすただ)が、農水産物の交換の場所として開いたものと伝えられている。出店数40~50店、場所は1日から15日までは下町朝市通り、16日から末日までは仲町朝市通りで、近隣の農家で採れた野菜や花、勝浦漁港などからの魚介類や農水産品加工品などが売買される。特に初鯉の水揚げは日本一と言われ、時期には多くの観光客が訪れている。



港の朝市

また平成25年から毎月第1、第3日曜日、いすみ市の大原漁港の荷捌き所で開かれている港の朝市は、出店数40~50店、魚介類、干物、野菜、果物、花などの地元特産物や農水産品加工物の売買と、購入した魚介類などをその場で炭火焼きで食べることが出来るバーベキューコーナーもあり、新しいスタイルの市としてにぎわいを見せている。

文：M. O.

参考：夷隅町史(平成16年)

いすみ市に見られるヤドリギの一種・オオバヤドリギ

我が家の庭に、高さ1mくらいの樫(はぜ)の木が生えている。植えたわけではないから、いつか種が飛んできたのだろう。やがて芽が出て根は土の中に広がり、水分などを取り込む。広がった葉で日の光を受けて育ってきたのだ。このように多くの植物の根は、土の中から自分に必要なものを取り込み、体に合うものに作りかえている。ところが一部の樹木では、相手の樹木の体に根を入り込ませ、必要な養分を自分の方へもってきてしまうものがあり、宿り木と呼ばれている。(ここからは植物の名を、習慣に従いカタカナで書くことにする)

木を見上げたとき、幹の途中に違った種類の木が生えていることがある。ヤドリギだと時々間違えられるが、これは枝を落とした所や枝の分かれ目が窪みになり、風で吹き上げられた土がたまり、そこに運ばれた種が育ったものだ。そうかどうかを確認したいなら、根元を掘り、根が相手の木とつながっていないことを確かめることが必要だ。でもそこまでしなくてもヤドリギの種類は少なく、見分けることはそう難しくはない。



写真1 センダンを植木鉢のようにしているハゼ

日本で知られているヤドリギは 5~6 種類ある(数に幅をもたせたのには理由があつてのことだが、ここでは触れない)。このうちの3~4種類をいすみ市で見ることができる。そこで3種の名前を挙げると、ヤドリギ、オオバヤドリギ、ヒノキバヤドリギ。ここに示した名前を見て何か変だと気づく人もいるのではないか。それは、ヤドリギの名が二通りの意味で使われてしまったからだ。

初めの方では、相手にとりつく木のグループ全体を指す名として使われ、後の方ではこのグループのなかの一つのメンバーの名として使われているからである。文章の流れでどちらの意味かは分かるのだが、ここではグループ名の方をそのまま使い、メンバー名の方をヤドリギ(狭)と使い分けることにする。名前の使われ方が広義か狭義かは他にもあって、スマレなどは身近ないい例であろう。



写真2 ケヤキについたヤドリギ(狭)
このように木全体が丸い固まりになることが多い

春になると市内でも何種類かのスマレを見ることができる。その中で、長さが数cmの細長い葉で濃い紫の花を咲かせるのがスマレと呼ばれている。(この煩わしさを除く一つの方法は学名を使えばいいのだが、「学名とは何か」と、細かな話になるので、これ以上触れないことにする)

ここに上げた3種類のうち、市内ではオオバヤドリギを一番多く見かける。そして相手の木がかなり葉を落としていたり、時には枯れてしまうのを見てきた。これがヤドリギを調べる切っ掛けだった。オオバヤドリギを見つけたときはその関係者に「ことによると大事にしている木を枯らすこともあります」と何度か話してきた。だが悔やまれるのは、ある神社のタブノキにオオバヤドリギが広がり、「いま駆除すれば木はほぼ救かるはずですよ」と話すと、「神社の木は伐るものではない」と断られたことである。数年後にその大木は枯れてしまっ

た。

神社の木は伐らない、これが日本全体でも神社の柱を守ってきたことは認める。だがその柱に他からやってきて、元々あった木を駄目にしてしまうなら、その相手を取り除く方がいいのではないか。人の体に例えるなら、体に広がった悪い部分を取り除くことで健康になれるならその方がいいのではないか。それともなるがままに手をつけないでいるのが一つの選択肢なのか。

これに拘るのは、現在同じ神社で、新しく神木となったタブノキにオオバヤドリギが繁茂しているからである。最近見てみたら、地上 1.3m の高さでの幹の直径は 1.5m ほどで、オオバヤドリギが7株ついている。これだけの理由で、1・2 年のうちに枯れることはまずないだろう。だが上部の葉は少なく枝が透け、全体的に元気がないのが一目で分かり、いずれは枯れるだろう。関係者に強く訴えるべきとも思うが、枝を切ったときに別の原因で木が枯れ、切ったのは間違いだとされることが懸念され、これ以上言うのを迷っている。

オオバヤドリギの特徴を記す。常緑樹でいつも緑の葉をつけているから、自らも体を作り上げる働きがあるので半寄生といえる。葉は卵形か、それより少し細長くした形。大きいもので長さが 6~7 cm ほどで、縁にギザギザはなく滑らか。葉の上面(表)はテカテカとしていて、下面(裏)は赤褐色の毛が沢山ついている。成長している枝先の数枚の葉も赤褐色をしている。相手の枝に沿って根を伸ばし、天に向かう枝と垂れ下がる枝が混ざり合い、図鑑によっては、ややつる性と書くものもある。木全体の大きさとしては、20~50 cm ほどのものをよく見かけるが、時に 2~3m のものにも出会う。ただしこれが1本の木なのか、数本が混ざっているのか区別のしようがない。これは絡み合っているため、マツ、スギ、モチノキ、ウメ、イチョウ、ヤマモモ等々のように1本で立っていないからである。

花は9月から11月頃まで見られる。大きさ数mmの円い蕾が、長さ3cmほどの筒状に伸びるとやがて開花する。アサガオ、コスモス、ヒャクニチソウ、マツバボタンほどの花の大きさではないから、ほと

んどの人は見逃してしまうだろう。だがこの花に気づいたら、赤・紺・緑の三色の見事な取り合わせに感嘆するだろう。

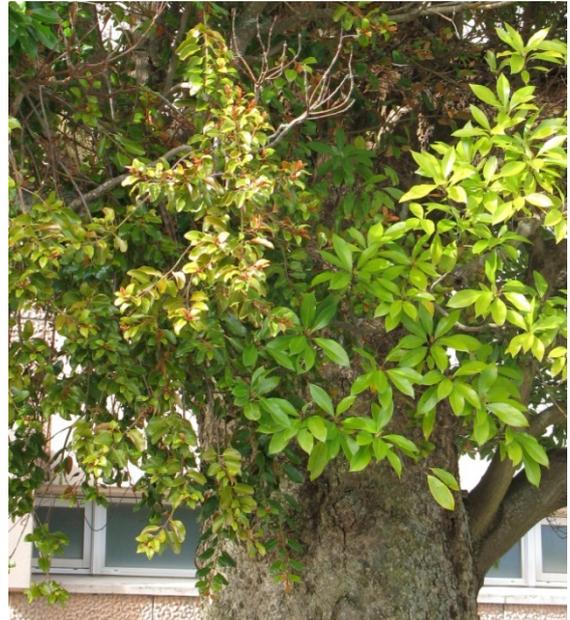


写真3 タブノキに取り付いたオオバヤドリギ
画面のほぼ左半分を占めている



写真4 中央に花、上部に沢山の蕾

旧の夷隅・岬・大原町のいずれにもこのヤドリギは育っていて、神社、寺院、民家の庭の生垣などに見られる。環境と文化のさとセンターから半径2km以内で見ると、少なくとも6カ所にある。ほとんどが高い位置にあり、手で触れる所をと望むなら、外房線から1kmのところの民家の生垣とか、公共機関の建物がある庭、とある店舗の駐車場などがいい。(迷惑が掛かるのを心配して細かくは省略する)

観察会で植物の名前など知識を得ることも大事だが、それを皆さんに知っていただけるよう努めることもまた必要ではないか。

文：牧野植物同好会運営委員
北菅野生植物調査室 土屋喜久夫

■夷隅川流域よもやま話～その22・2015年夏の天候～

最近、気象現象が極端化、狂暴化しているといわれます。昨2014年は、広島で集中豪雨による土石流の発生により、多くの家屋が壊されたことは記憶に新しいことでしょう。今年2015年は、連続降水により、関西中国地方では列車が停まったり、茨城県常総市では鬼怒川の堤防決壊が起きて約40平方キロもの浸水区域が発生しています。後者は「平成27年9月関東・東北豪雨」と名付けられました。

当センターでは開館日に、中庭にある百葉箱で午前9時に気象観測を行っています。6月から9月までの観測データなどから当センターのあるいすみでの今年の夏の天候の特徴をまとめてみました。

＝6月 梅雨らしい天候

- ・関東地方の梅雨入りは、6月3日。
- ・曇や小雨の日が多く、また数日ごとのまとまった降雨があり、梅雨らしい天候。
- ・月降水量は198mmと平年並みの梅雨らしい雨量。

＝7月 雨続きと晴続き

- ・上旬は、雨が続き。7月降水量274mmのうち263mmが降る。10日に梅雨明け。中旬下旬は、晴れて暑い日が続く、降水がない。
- ・日中は34℃超えの猛暑が続き、夜間も熱帯夜が続く。
- ・畑は、高温に加え、乾燥状態が続く。

＝8月 晴続きの後、小雨続き

- ・月前半は、雨が降らず、暑い日が続く。関東で最高気温記録更新が続く。
- ・お盆以降、曇りと雨の日が続く、気温が下がる。
- ・25日以降、2週間程曇と雨の日が連続し、日照時間が極端に少ない。

＝9月 スムーズに涼しくなる

- ・上旬から秋雨前線ができて曇と雨の日が続く、

晴れる日が少なかった。

- ・8～9日に118mm、18～19日に198mmと、台風の影響によりたくさんの降水があった。
- ・いすみや関東地方では台風の通過ルートにならずにすんだが、秋雨前線による雨が続いた。
- ・稲刈り前の田んぼが乾かずに、農家は稲刈り日の設定と泥田での機械の走行に苦労した。
- ・残暑の厳しさはなく、スムーズに秋の気温へと移行した。



・2つの台風挟まれて、南北に連なる線状降水帯が発生して、関東の一部の地域にだけ強い雨が降り続いた。鬼怒

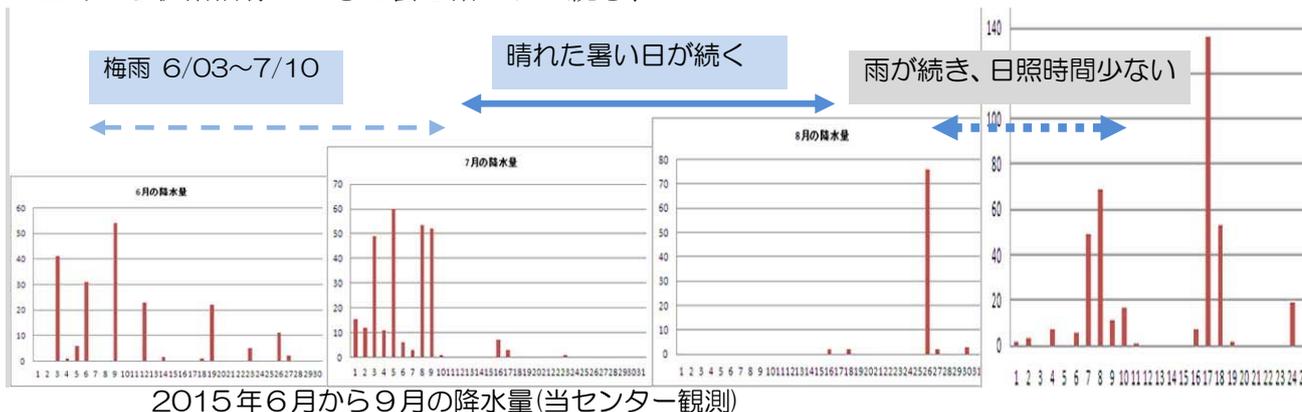
川堤防が決壊し、茨城県常総市で家が流されたり、床上浸水などの甚大な被害が発生した。

- ・作況指数は、千葉県で104、全国では102で、やや良と2年連続で豊作。

世界的な7月8月の気候の特徴を見ると、月平均気温が高く(統計開始以来1位)、エルニーニョ現象が続いているといえます(気象庁 地球環境・海洋部)。ドイツ、パリ、ジュネーブでも最高気温が約40度と、観測記録が更新されています。また、韓国、北朝鮮、タイ、米カルフォルニアでは、過去を上回る激しい干ばつが記録され、インドやパキスタンでも熱波が発生しています。

文：S. A.

参考：気象庁Webサイト、当センター気象観測簿



《 行事報告 》

7月14日～20日

ハス観賞週間



今年のハスは、昨年が続いてイノシシがハス田に侵入した影響もあったのか、観賞週間の期間にはあまり花が咲きませんでした。例年よりも開花が早かったことと、観賞週間をかなり過ぎた後にも花が咲き続けたことが例年との違いでした。

イノシシ被害をなくすためビニールテープを張り巡らせるという、新しい対策を試しています。色々課題は多いのですが、来年は観賞週間に合わせて花芽がついてくれることを願うばかりです。

7月18日

海辺の植物観察



台風の影響で強い風が吹いていましたが、その風が暑さを吹き飛ばしてくれて観察会には都合の良いコンディションでした。

いろいろな種類の海辺の植物と出会えました。花びらと花びらの間に少し隙間が空いていることから名前が付いたスカシユリ、花の形がヒガンバナに似ているハマオモト、ほかにもコウボウシバ、ハマニンニク、ケカモノハシなどなど。

日本で最初の国指定天然記念物「太東海浜植物群落」や海辺砂地での観察など、里山とは趣の異なる植物観察でした。

7月26日

センター内ホテルの水路で生きものを探そう



石をひっくり返したり、護岸をけったり、水をバシャバシャと音を立てて歩いたり、水草の周りを網でかき回したりと、いろいろな方法で生き物を隠れ家から追い出して捕まえます。みんなで協力するとたくさん捕まえられます。すぐに分かる生きものは、メダカ、ドショウ、アメリカザリガニなど。デイキャンプ場に戻り、仕分けをして詳しく観察しました。

暑い夏ですが、水路や木陰で生きもの探しに夢中になると、暑さを忘れるひと時でした。

8月8日

夏の星座観察



朝、曇ののち、昼間はほぼ晴れ。閉館した4時半は青空が広がっていましたが、5時過ぎに空を見上げると一面の雲。でもキャンセルなしで参加者が集まってくれました。

まずは部屋の中で星座のお話。外も暗くなったので部屋を出ると、雲の切れ間から土星や北斗七星、夏の大三角形、それに天の川。「あ、見える！」といった歓声も聞かれましたが、やがて雲が出てきてしまいました。それでも天体望遠鏡でみなさん土星をしっかりと見ることができました。

お天気次第の自然観察はなかなかつらいものがあります。次回は冬、寒さ対策をして参加してください。

8月8～13日

ミニプログラム・スペシャルウィーク さとの夏遊び



「貝の名前を調べよう」、「貝がらアート」「竹とんぼ・紙鉄砲」「竹馬作り」「牛乳パックでハガキ作り」「ガサガサ探検隊」など、当日参加のこの期間だけのミニプログラムです。ミニとは言っても、準備は普通の行事と変わりません。

今年は一日2回で合計10回実施しました。



8月23日

トンボの沼のトンボを見に行こう



一家族だけの参加となりました。トンボの沼の小屋前で捕虫網を配り、簡単にトンボの捕まえ方、持ち方を説明したあと、トンボ捕獲・観察をいたしました。参加者、講師、センター職員と、全員が合計6本の網を持って、トンボの沼を一周しました。トンボを捕まえては、共同で使う大きな網かごの中に入れました。小屋の前に戻って、捕獲したトンボたちをじっくり観察しました。その後は、網かごから昆虫たちを解放してあげました。今年、7種類のトンボ(トンボ目)とツトトンボ(アミメカゲロウ目)を確認しました。

9月5日

稲刈り体験をしよう



数日間続いた雨にひやひやさせられましたが、雨は降りませんでしたが、丁度良く曇っていて稲刈りには絶好の天気でした。4月26日に田植えをしたコシヒカリです。生長した結果、一粒が数百粒にも増えています。このあと、乾燥、粃摺り、精米を経ておいしい新米のごはんになります。小さな子どもたちも最初は一生懸命、手鎌を持っての稲刈り挑戦でしたが、すぐに虫捕りの方に夢中になってしまいます。コンバインに乗ったり、昔の農機具体験をするなどして楽しい体験の一日を過ごせたようです。

9月27日

いも掘り・焼いもにチャレンジ!



中止になりました。その訳はイノシシに畑に入られてしまったからです。初めてのことで、4回もやられました。ビニルハウス用のアルミパイプで柵を巡らし、ネットを張って毎年防いでいましたが、今年は柵を持ち上げネットを破ってたびたび侵入されました。その都度、柵とネットを増強しており、稲刈りの終わった田んぼから電気柵を移設設置しましたが、時すでに遅しとなりました。試し掘りをして判明しましたが、ほとんど食べられてしまった後でした。申し込みのみなさんには残念ながら中止の連絡とあいなりました。

☆行事内容やセンターの日常を、センター日誌 (<http://isumisato.exblog.jp/>) にてご覧いただけます。

これからの行事案内

10月 (8月1日から受付開始)

●草木染め体験

3日(土)10:00~15:00 定員20名 小雨決行

▲参加費:1,600円



自分でデザインして、シルクの布を自然の色で染めてみましょう。どなたでも大歓迎!

持物:剪定ばさみ、作業できる服装、弁当、長靴、軍手

●竹かご教室(入門)①②③④

24(土)25(日)31(土)11月1日(日)

10:00~16:00 定員20名 全4回

▲通し参加費:1,000円

竹の切り出し、ひご作りから始めて、4回終了までに完成させましょう。

参加対象:高校生以上、全4回参加できる方。

持物:竹用ナタ、竹ひきノコ、植木ばさみ、膝あて、軍手、弁当



=== 第19回さとの文化祭 ===
 11月14日~11月23日(土曜日~月曜日)
 ※16日(月)休館

11月 (9月1日から受付開始)

●竹かご教室(応用)①②

28日(土)、29日(日)

10:00~16:00 定員10名 全2回

▲通し参加費:500円

竹かごのいろいろな作り方を学びましょう。

参加対象:高校生以上、全2回参加できる方、竹ひごを作れる方

持物:竹用ナタ、竹ひきノコ、植木ばさみ、膝あて、軍手、弁当



12月 (10月1日から受付開始)

●つるでリースを作ろう

5日(土)9:30~15:30 定員20名 小雨決行

山に入ってつるを取り、つるを使ってリース作りをします。

▲参加費:200円

持物:剪定バサミ、長靴、軍手、山に入れる服装、弁当



●米作り3・もちつきをしよう 小雨決行

12日(土)9:30~14:00 定員30名

つきたてのお餅を味わって、

お正月の丸餅を作りましょう。

▲参加費:一家族600円

持物:はし・皿、頭巾、エプロン、寒くない服装



●米作り4・おかざりを作ろうA

19日(土)9:00~12:00 定員15名



わらを使って、お正月の鳥居形お飾りを作りましょう。初心者向き。

▲参加費:500円

参加対象:中学生以上

持物:植木バサミ、座布団、寒くない服装

●米作り5・わらでリースを作ろう

22日(火)9:00~12:00 各定員20名

わらを使って、リース飾りを作りましょう。

▲参加費:一家族200円

参加対象:高学年以上

持物:剪定バサミ、長靴、軍手、作業しやすい服装、弁当



●米作り6・おかざりを作ろうB

23日(水) ①9:00~12:00 ②13:00~16:00

各定員15名

わらを使って、お正月のおかざり(輪飾り)を作りましょう。

▲参加費:500円

参加対象:中学生以上

持物:植木バサミ、座布団、寒くない服装



1月 (11月1日から受付開始)

●米作り7・わらづと納豆を作ろう

9日(土)9:30~12:30 定員20名

自分でわらを編んで、有機大豆で

わらづと納豆を作りましょう。

参加対象:中学生以上

▲参加費:500円

持ち物:植木バサミ、新聞紙、バスタオル、使い捨てカイロ、寒くない服装



●ススキでミニほうきを作ろう

23日(土)10:00~12:00 定員20名 雨天中止

ススキやオギの枯穂を使ってミニほうきを作ります。

▲参加費:200円

持物:剪定バサミ、軍手、作業

できる寒くない服装



●里山の鳥の観察

30日(土)8:30~11:30 定員20名

雨天順延31日(日)

里山にはどんな鳥がいるで

しょう?観察に行きましょう。

持物:寒くない服装、観察道具(あれば)



申し込みはお電話(0470-86-5251)が確実です。受付は朝9時からです。

センターの生き物たち



ヌマトラノオ／サクラソウ科

さとのかぜ 192 号の表紙に当センターの湿性生態園に咲くトラノオ属の一種（おそらく雑種のイヌヌマトラノオ）を掲載しましたが、この雑種の花が終わった7月中旬からイヌヌマトラノオの片親であるヌマトラノオが花を咲かせ始めました。ヌマトラノオの花穂は直立していて先が垂れず、イヌヌマトラノオやもう一方の親であるオカトラノオは花穂の先を垂らします。この特徴から、同時に花を咲かせていてもヌマトラノオの見分けは容易です。



ニホンリス／リス科

野外のベンチの上にオニグルミの果実が半分に割られて殻だけがありました。ニホンリスの食痕です。ニホンリスは、実りの多い秋の間に冬に備えて食べ物を地面や枝の間に貯えておく行動（貯食行動）が知られています。貯えたものの食べられずに残った種子が発芽することがあり、種子を食べられてしまう植物側にも、少し離れた場所まで種子を散布してくれるメリットもあるようです。（写真は2013年7月撮影のヤマモモの果実を食べるニホンリス）

いすみ楊枝 —千葉県伝統工芸品—

センターでは、「いすみ楊枝」を県内外に広く紹介するため、毎月高木守人氏に実演をお願いしています。

日時 毎月第3日曜日(9:30~16:00)

場所 ネイチャーセンター

講師 高木守人氏

参加料 材料費など実費いただきます

内容 楊枝・花入れ・茶杓作り など

編集後記

◆市街地の真夏のヒートアイランドに比べれば、センター付近の気温は薄暗くなるころからいく分すこしやすくなってくれます。日中の暑いなか作業をした体には自然の風が心地よく、帰宅時はよく窓を開けて車を走らせました。そんな帰り道では、トウキョウダルマガエルやクツワムシの声も。クツワムシの声は大きくて走行中でも聞き分けられます。茂原街道でも声が聞かれ、余裕があるときにはハンディーGPSに位置を記録してみました。来年の夏は寄り道してデータ収集ができれば・・・。

◆行事や各種学習会に参加した小中学生を対象にスタンプカードの配布を計画しています。スタンプ3つを集めた参加者には、オリジナル缶バッジをプレゼントの予定です。所長

行事への参加申し込み、お問い合わせは、電話(0470-86-5251)、ファックス(0470-86-5252)、または、直接センター事務室にお申し出下さい。定員のあるものについては、定員になり次第締め切らせていただきます。あらかじめご了承下さい。全ての行事はネイチャーセンターに一度集合してから移動します。

*eメール可(メールアドレス:senta-sato@isumi-sato.com(すべて半角小文字です))

*行事申し込み後、都合によりキャンセルする場合は必ず早めにセンターまでご連絡下さい。

◆ ◆ ◆ 利用案内 ◆ ◆ ◆

休館日：毎週月曜日(月曜日が祝日の場合はその翌日)、12月29日～翌年1月3日

開館時間：9:00~16:30、入館料：無料

※当施設のご案内や解説などを希望される団体は、2週間前までにお申し込み下さい。